

# The Language of *Kyng Alisaunder* and Do

『キング・アリサンダー』の言語と Do

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期英語学英文学専攻

学生番号 : D 125017

氏名 : 松沢 絵里

本論文は、14 世紀初期のロンドンの英語で書かれたとされる 8021 行の脚韻詩『キング・アリサンダー』（KA）において、動詞 DO がどのようなふるまいをしていたかを調査するものである。KA は従来、East Midland 方言で書かれているとされていたが、校訂者スミザーズが、ロンドンであると唱え、その後、綴り字による研究により 14 世紀ロンドンの英語を 4 つのタイプに区分したサミュエルズ (1963, 1968<sup>2</sup>)、また、本の流通という点から 14 世紀の文献を研究した Hanna (2005) により、タイプ II の 10 の写本のうちの一つであるとされる。動詞 DO は、やがて英語の中で助動詞として重要な位置を占めることになるが、本論文は、DO がその役割を担う以前の状態を調べるものである。

第 2 章では KA の現存する写本および初期印刷本の中で、オックスフォード大学ボドリアン図書館蔵の B テキストが、上記タイプ II のロンドン英語で書かれていることを説明する。KA の重要性は言語資料以外にもある。主人公アレキサンダー大王は、生存中からすでに伝説の人であり、英文学における KA も、常に魅力ある英雄として描かれてきた 2000 年以上にわたるアレキサンダー伝説の中にくみこまれた一編である。KA は、優れた文学的技巧をもって書かれており、他のアレキサンダー物語同様、その物語を聞いたロンドンの人々に上質の娯楽を提供した作品である。

第 3 章では 14 世紀ロンドンの社会的状況と、言語的状況を説明する。当時のイングランドは羊毛の原産地として台頭し、さらに、羊毛製品を作るフランドル地方の覇権を手にしようとしていた。それは結局フランスとの百年戦争となるのであるが、その中で、ロンドンは貿易の中心地として発展し、大きな人口移動が 13 世紀末から 14 世紀にかけて起こった。14 世紀のロンドン英語のタイプ II とタイプ III が大きく異なるのはこのためである。そのような、人口の移動の激しいロンドンにおいて KA の言語も古層のロンドンのも

のから、現代標準語の先取りとも考えられる新しいものまで、様々な、音、形態、語彙が観察される。

第4章では、KAに見られる14世紀初期のロンドン英語の多様性を、実例を挙げ説明する。音韻面では、OE /æ:/ に由来する音としては、古層の/a:/、KAの属する一般的なロンドン・シティタイプの/e:/に加え、大母音推移の先取りとも考えられる/i:/まで観察される。また、OE /æ:a/に由来する音としても、上記のものに加え、北方方言に由来すると考えられる後舌低母音/a:/が観察される。動詞 SLAY におけるこの発達形の発音は、現代標準英語では消えたものの、当時のロンドンでいかに多様な発音が観察されていたかの証拠となる。

また、MEで消えた高舌円唇母音/y:, y-, y/に由来する音も、イングランド全土の方言に現れている3種の発音それぞれがKAの脚韻に現れている。

開音節長化と屈折接尾辞の消失は進行中であり、長化に伴う下げは後母音にのみ起こっているが、下げを伴わない音も観察される。

三人称単数現在の語尾には北方方言起源とされる-sが観察され、出現頻度は多くないが、脚韻の位置に頻繁にあらわれている。そのほか、二人称現在形では屈折語尾がない形があらわれており、BE動詞の変化も現代標準語に近い変化形を示している。また代名詞についても古ノルド語語源で北方方言に由来する THEY や SHE の形が観察される。

このような言語状況の中での DO のふるまいを第5章以下で説明する。まず第5章では、DOのKAにおける用法を分類した。281のDOの用例中、不定詞を伴わないものが204あり、これを MAIN VERB 用法とした。不定詞を伴うものを VERB V 用法とし DO の場合は DO V である。DO は目的語、つまり V の主語を伴うものがあり、これは DO OV 用法とした。Do V 用法は 60、DO OV 用法は 17 である。さらに、DO V と統語的に同じであり、ME ロマンズに

頻出する GIN V 用法と比較した。韻律的には、GIN はその不定詞を脚韻の位置に置く頻度が全体で 88.2%と DO の 50.6%よりかなり高く、GIN を使う一つの目的と考えられる。

Gin V 用法は、Terasawa (1974)、Brinton (1996)らにより語用論や文体論の点から研究が進んでいる。KA でもそういった文体的役割を GIN V は担っていた。そのため、GIN V における不定詞は、動作、話、視覚、感情の動詞が多いとされるが、KA に現れるものは、それらも含め DO と GIN に共通するものも多数あり、その中で、用例の多い BEAR と CRY を不定詞とする例を比べてみた。ME BEAR の 4 つの意味のうち、「打つ」の意味の時は GIN とのみ共起し (7 例)、DO と使われている例は (1 例) 「運ぶ」の意味であった。GIN は BEAR 「打つ」の動きを強調するために使われ、DO は使役の意味でつかわれていた。

CRY の場合でも、GIN は物語において、その叫び声を効果的に聞かせる場面で使われ、DO は使役である。しかし、その DO の用法の中でも、叫び声を効果的にする文体上の工夫がされている。さらに、DO V 構造でつかわれているため、DO そのものの意味が使役なのか、迂言的なのかはつきりしない。これを Ellegård は *equivocal do* と名付けているが、どちらにしても物語の進行にはさしつかえはない。しかし、叫び声 CRY の効果を高めるように DO が工夫されているため、DO に強調的な意味合いが感じられる。また、GIN と異なり DO は将来助動詞となる、BE, CAN, DO, HAVE を不定詞にとる。

第 7 章では強調的意味合いが感じられる DO が、韻律的に強位置にあるかどうかを検証した。屈折語尾の消失が完全でないため、屈折語尾のない行のみで検証をおこなった。GIN は強位置と弱位置がほぼ同数で、音節数を増やすためにもつかわれているが、DO はやや強位置が多いが、主動詞の例が多く、確証にはいたらなかった。KA の DO には、疑問文、否定文における用法はな

く、ほとんどが使役用法である。しかし、迂言的用法とみられるものが3例、また、使役の命令とも、迂言的命令とも考えられるものが少数あり、こういった例には、強調の意味が込められている可能性があり、OED、MED、Mustanoja（1960）も同様の観察をしている。

第8章では使役用法の DO を検証し、他の使役動詞と比較した。先行研究では、Ellegård（1953）の *equivocal do*、つまり、本研究における DO V、について様々な統語的説明が行われている。KA の使役用法を見てみると、現代英語に見られる MAKE と HAVE は使役動詞として使われていない。HAVE の初出は1390年ごろであり、これはKA の事実と合致する。MAKE の初出は1225年であり、さらに Ellegård は KA グループの中に分類される他の作品 *Of Arthour and Merlin* や *The Seven Sages of Rome* には使役の MAKE があるとするが、KA には見当たらなかった。また、主動詞率と主動詞が脚韻の位置にある率を比較した。

統語的に興味深いのは、ほぼ使役の用法で現れる DO が不定詞をとる場合、意味が曖昧になる DO V 構造が圧倒的に多いことである。不定詞を伴う例77例のうち60が DO V 構造であり、明確な使役の例（DO O V 構造）は17例である。これは他の使役動詞と異なる、他の使役動詞は不定詞の主語が明確である VERB O V 構造がほとんどであり、VERB V 構造の HIGHT の3例、LET の1例には曖昧な意味はない。

第9章では DO と過去現在動詞と WILL を比べた。OED は DO の用法として、使役以外に6つの用法を挙げている。（1）迂言、（2）肯定文における倒置を伴う迂言、（3）疑問文での用法、（4）強調用法、（5）否定疑問文における用法（6）否定叙述文における用法である。このうち KA の時代、14世紀初期に見受けられるのは、使役、（1）迂言、（2）肯定文における倒置を伴う迂言であるが、いずれも、特に（1）、（2）については少数で

あるが、KA にも例が表れている。(3) – (6) の初出は 1390 – 1417 年であり KA より後で起こる。一方、本来一般動詞の意味を持っていた過去現在動詞、および WILL の不定詞を伴う用法はすべて OE から存在する。

OED と MED からこれらの例を集めてみると、まず、同じ文でも疑問文としたり、強調文としたりで、解釈に揺れが見られるうえ、MED も強調文との区別が困難であると説明している。

また、使役、迂言用法は現代英語では消え、迂言用法は地域方言に残る。

次に Quirk *et. al.* (1985) をもとに、現代英語の DO の用法をまとめた。Quirk *et. al.* は現代英語の動詞を 3 つに分け (1) 語彙的動詞 (2) 主要動詞 (Primary Verb) (3) 助動詞とする。それぞれ、屈折、文法に違いが見られ、特に DO に伴う用法を Do-support の用語で説明している。DO の用法は、語彙的動詞の否定文、疑問文、否定疑問文、否定の BE 命令文、肯定文での強調につかわれる。この DO は助動詞同様、NOT のつく否定文等で第一動詞として OPERATOR として使われるなど、共通点が多い。

次に、それぞれの過去現在動詞および WILL の一般動詞としての用法と VERB V 用法の用例を出した。そして、後に否定の副詞 NOT となる NOUGHT の位置を調べた。また、CAN は DO の後などで不定詞としても使われていることが分かった。

第 10 章で、これらすべての動詞の主動詞率、主動詞が脚韻の位置にくる割合、VERB V において VERB が脚韻の位置にくる割合、V が脚韻の位置にくる割合を比較した後、KA における、使役用法の DO とその役割の変化の関係を考察した。

Do が不定詞を伴う場合、意味が曖昧になる DO V 構造をとる率が高い、そして、その解釈に揺れが見られ、韻律等からは、客観的に証明はできないも

のの、強調の意味を否定できない用例が多数出てくる。KA の DO V 構文にはこういった意味が多重になり混在していると考えられる。それを可能にしたのは、目的語が不明瞭なこの構文故と考えられる。やがて15世紀初期ごろから、HAVE が使役として使われ始め、使役の DO はたとえ MAKE が使用されていたとしても、その役割を HAVE に譲り Do O V 構造は消え Do V が残る。また迂言の DO も方言には残るが、標準英語では消えていく。そこから、DO の強調の意味が明瞭に見え始め、さらに、Do V は他の助動詞と同じ構造であったため、助動詞が担っていた OPERATOR としての役割を担うことができた と考える。